

第一インターとバクーニン

小川 正 夫

ヘーゲルをもふくめて多くの哲学者が世界の解釈に浮身をやつして来た。時、必要なのは世界の解釈ではなくて、世界の変革である。これを自覚し、一切の形而上学からの離脱を宣言し、もっぱら実行的行動者として、無類の雄弁家として、パリケードの敵な戦士として、わがミシエル・バクーニンは何れも西ヨーロッパに起きたあらゆる革命闘争の第一戦にいた。しかも、かかる行動型の人物にありがちな粗雑さなどは彼にはみじんもなかった。彼は実に細かい神経の持主であつた。ドレスデン一揆の前、当時、眼を病つていた音楽家ワグナーとの最初の出会いの時、バクーニンは彼の眼にランプの直射光があたらぬように、長い対話のあいだ中、それとなくその巨大な手で光線をささぎり続けていたと言われている。

一八六三年彼はポーランドの革命に命をかけたが、その革命の国家主義的性質を見極めた彼は断然彼らと手を切り、労働階級の自覚と団結の基礎に立つ国際組織の必要を痛感して、大五年以来、肩をイタリヤに移してからは、もっぱら、国際兄弟連盟の建設にその努力を集中した。

この国際兄弟連盟こそ近世アナキズム運動の最初の組織体となつたもので、その綱領はバクーニンの自らの筆になつたものと云われている。この綱領の中に連盟員の綱領約三箇条を絶対的に認めること、この第一節(一)昨年カミュー、サルトル論争として世界の論壇をさわがしたカミューの名著「反逆的人間」の中で、カミューがバクーニンの傾倒しながら「バクーニンの生涯の初めと中ほどに」ニヒリスティックな意識「バクーニンの「悪い衝動」と書き、それによつて批評家グロスマンがドストエフスキの「悪魔」の主人公スタウロフ・バクーニンをモデルであるといふことがあることを認め、これを「バクーニンの不徳の連続の問題に属している」と見て、若し、連盟員を綱領

から無数の支持者を持つていたからである。

バクーニンはマルクスとの闘争は、二人の間の性格の相違や、その個人的な影響範囲の問題に重点があるのではなく、国家とオソリチイに対する現実上の彼らの教義の深い運命的な相違を以下の如くはつきりと説明している。

「余はコミニユニストではない。何故ならば、コミニユニストは社会の凡ての力を国家に統一し、国家の手中に凡ての資源の集中をさせ難いものにするから、これに反して、余は権威の原理の廃除と政府の補佐の完全な排除、即ち国家の腐敗を探究するから、国家は人間を道徳的に文明化するといふ見せかけのもとに、常に人間を奴隷化し、利己的に利用し、荒廃せしめるものだからである。

一八六三年彼はポーランドの革命に命をかけたが、その革命の国家主義的性質を見極めた彼は断然彼らと手を切り、労働階級の自覚と団結の基礎に立つ国際組織の必要を痛感して、大五年以来、肩をイタリヤに移してからは、もっぱら、国際兄弟連盟の建設にその努力を集中した。

この国際兄弟連盟こそ近世アナキズム運動の最初の組織体となつたもので、その綱領はバクーニンの自らの筆になつたものと云われている。この綱領の中に連盟員の綱領約三箇条を絶対的に認めること、この第一節(一)昨年カミュー、サルトル論争として世界の論壇をさわがしたカミューの名著「反逆的人間」の中で、カミューがバクーニンの傾倒しながら「バクーニンの生涯の初めと中ほどに」ニヒリスティックな意識「バクーニンの「悪い衝動」と書き、それによつて批評家グロスマンがドストエフスキの「悪魔」の主人公スタウロフ・バクーニンをモデルであるといふことがあることを認め、これを「バクーニンの不徳の連続の問題に属している」と見て、若し、連盟員を綱領

マルクス派の提出した「相権説」増加の提案も同じく少数の賛成で却下された。マルクスの支配下にあつた総評議会の提案が最初に敗れたというこの事実、明かに第一インター内に於けるマルクスの影響の低下を示すものである。この事件はマルクスを非常に不快がらし、彼の番頭の一人である独逸人の仕立屋エカリスは書いてあるが、この会議以後オポレオン三世が初めた普仏戦争までの間、マルクス派が如何にバクーニンを誹謗し狂言したかは歴史上有名である。しかし、その誹謗はバクーニンの支持者達になんの影響も与へなかつたばかりかむしろマルクス派衰微の原因となつた。

マルクス派の提出した「相権説」増加の提案も同じく少数の賛成で却下された。マルクスの支配下にあつた総評議会の提案が最初に敗れたというこの事実、明かに第一インター内に於けるマルクスの影響の低下を示すものである。この事件はマルクスを非常に不快がらし、彼の番頭の一人である独逸人の仕立屋エカリスは書いてあるが、この会議以後オポレオン三世が初めた普仏戦争までの間、マルクス派が如何にバクーニンを誹謗し狂言したかは歴史上有名である。しかし、その誹謗はバクーニンの支持者達になんの影響も与へなかつたばかりかむしろマルクス派衰微の原因となつた。

バクーニン全集発行回顧

川 合 仁

語に翻訳するから金を出せ。を見せられ、若し三四人の友人がやつて来て私に「バクーニン全集」の発行人になつてくれと言ふ。

きいて見ると、彼等はバクーニン全集の発行を計画し、友人同志が力を合せ翻訳その他の働きで得た金を貯金し、既に発行資金を用意した。石川三郎、新島格氏等先輩の協賛も得て、既に発行に着手しているが、学生である吾々の名前が発行する訳にはいかない。種々相談の結果、あなたに発行人を引受けて貰うのが一番よろう。というのをそれを頼みにやつて来た、というのである。

高等学校の生徒であつた平松義輝、榎本桃太郎、うんちゃん(本名矢野)の諸君だつたと記憶するが、(このうち平松君は戦死、榎本君は戦死、うんちゃんは戦死)

市を二時間捜索したが居ない。それからホテルへ帰つてバクーニンの室を調べると開いたトランクの中に大佐宛の手紙があつて別れの言葉と、健康をいふ、外国へ渡航するから捜査は無用にしてくれとある港で調べると昨夜運く風色マントを着た人が一八六〇 好機を、ツァーから日本のミカド(万延元年孝明天皇在位第四年)へ贈物あり、イルクツクでS・Aガザリノフ大佐の一行がバイカルを渡りアムール河を降りニコラエウスタ港まで運送することになった。バクーニンは知事に港の歴史調査のため同行を願ひ、十月十日に船に乗り、警察の手で尼港金

バクーニン略年表

- 一八四一 五月、モスクワで哲
- 一八四二 三月、モスクワで哲
- 一八四三 フルードンと合つた。
- 一八四四 フルードンと合つた。
- 一八四七 三月、ロシア政府の要求でフランスから退散され、オーストリア・プラハでスラウ大会参加。欧州大饑饉。
- 一八四九 五月、ドレスデンの暴動に参加。親友音楽家ワグナーとケムニッツへ脱出。
- 一八五〇 一月、十六捕われ死刑宣告後、オーストリアへ引渡さる。
- 一八五一 五月、プラハでフランス解放運動のため死刑宣告。
- 一八六〇 好機を、ツァーから日本のミカド(万延元年孝明天皇在位第四年)へ贈物あり、イルクツクでS・Aガザリノフ大佐の一行がバイカルを渡りアムール河を降りニコラエウスタ港まで運送することになった。バクーニンは知事に港の歴史調査のため同行を願ひ、十月十日に船に乗り、警察の手で尼港金
- 一八六二 九月、第一インターはバクーニンを除名した。当時バクーニンはスイスのロカルノで貧しい家庭をもつていた。
- 一八七四 いくらかの連盟員が入りイタリヤに近いガノに家を持ち、イタリアのボロニヤの暴動にはカフエロと共に参加、危くのがれて帰つた。
- 一八七六 七月、一日、ベルンへ来たがそれが最後で二人の親友にみとられ、一寸の間の死闘の後この世を去つた。六十二才。
- 一八七九 三月、十八日、パリ・コムニオン樹立。この年クロボトキンと合つた。

訴える
植村 二〇 諭
日ハタ発行所取扱
が入っており、幸徳の詳
細な伝記とともに肖像、
筆蹟、墓碑などの写真も
のせてある。発売は中村
市小姓町「右城松風堂」

久保讓

として世界各国に翻訳流布された唯一のものであった。ところがかれの同志ギョームが全集出版の計画をたてて原稿の整理をしたところ「神と国家」の原稿は実にバクティンが書きのけた大論文「專制的責任」になっていたようである。

一、革命家の自らに対する態度

ヘルツェンはバクーニンにつ
て書いてゐる。

「彼の幸福は、ただ一揆のうな
や、演説会場の騒音や、街の騒
や、または築塞ばかりではなかつた。彼はその前日の運動、すな

志に対する親愛、献身および同志達とはできるだけ一緒に

奔放であつた。彼の友人であつたヘルツエーンやツルゲエネフも、バクレーニンからたびたび金銭的な迷惑をかけられたようである。そして幾度も喧嘩をしたり仲違いしたりしながら、バクレーニンが病氣のウィイチが訪ねていつた。その晩年のときのことである。

◇ バクレーニンがロカルノに

結社は人民——即ち労働者の全的
すことを認めない。この種

病氣で息を詰らせながら、三十フ
ランを勘定して私に渡した。
「では、ロシアに着いたら、この
金はすぐお返えしします」
「誰に返そうというのか、私にか
その後三、四年たつて私
イスへ行つたときには、貸

日ソ漁業条約

◇ バクーニンが死んで今年は
うど八十年目、時代はちがう
われらバクーニンに学ばねば
ぬ多くのものがあるのを感じ
ずはないか。

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99

ならないのは、原稿の
べて手紙でやつてること
充分の連絡がとれかね
ニン特集ともなれば、
したものもあつたので
私の方で削つたものが

卷之三

ならないのは、原稿の依頼等すべて手紙でやつてることとて、充分の連絡がとれかね、バック・ニン特集ともなれば、一二重復したものもあつたので、それは私の方で削つたものがあります

発行所 クロハタ編輯局
福岡市西新町一丁目
二六番地
電話福岡④五八四一
編輯兼発行人 副島辰戸

定価一部 二〇〇円